二、試合

床に水を撒いた後、それで終わりにしようかと思うも、おしっこが広がっただけのような気がして改めて水を流す。それをブラシで擦ると一部だけが磨かれて不自然。別の汚れを落とし始めると、結局全体を掃除するはめになった……。

「ふぅ……ったく、なんでこんなこと」

凝り性なところのある徹は床をしっかり掃除しつくし、汗を拭っていた。

「？」

いつの間にか体育館の方が静かになっている。練習が終わるまで掃除していたのだろうか。徹は掃除用具を片づけ、そっと室内を見る。既に練習を終えており、人もまばらだった。

「今日はもう終わりか？　片付け手伝うぞ」

横倒しの支柱を抱えると倉庫の方へと運んで行く。こういう時、女子ばかりだと一人でもてるものを三人でよちよち運ぶから鬱陶しい。徹はネットを畳むように言い、てきぱき運んでいた。

「ありがと、徹君」

最期にネットを棚に戻したところで麻帆がぺこりとお辞儀する。温和で大人しく礼儀正しい彼女が相手だとホッとする。

「ああ。おやすい御用だよ」

「ほんと？　じゃあ、またお願いしちゃおっかな？」

くすっと笑いながら冗談の一つを言われると、そのまま真に受けたくなる。

わざとでも良い恰好をしたくなるタイプの女の子。そんな子だった。

「ん？　でも、なんか人少なくないか？　中倉とかどこ行ったんだ？」

「えと、いろいろ帰っちゃったから」

「なんだよ、後片付けも練習の一環だってのに……。ったく、しょうがねーな」

メンツを思い出せばそれも納得する。男勝りというか母親の権力をかさに着る瞳と芽衣。農協のお偉いさんの娘の理恵とその友人直美。常識知らずの転校生の綾子。おしゃべりばかりの美優とお世話役の佳代。何かしら理由を付けて面倒事から逃げるタイプばかりだ。

「おーし！　いくぞー！」

練習が終わったというのにまだ動き足りないのか、澪は梯子を伝ってギャラリーに上がる。

「おいおい、もう帰る時間だろ？　なに遊んでるんだよ」

「へへーんだ、徹、びびってる～？　みみずみたいなへんてこチンコ男！　ここまでおいでー」

「お前だって女子なんだから、もうちょっと言葉えらべってのー」

「へいへーい」

ときおり男子に混じって遊ぶことのある澪は猿のように俊敏。徹はあほらしい挑発と思いつつも彼女を追ってギャラリーに登る。どうせ一本道。逃げる場所がない所に逃げるのは彼

女らしいと思いつつ……。

カーテンにくるまり逃げるも上靴が見えるのでそこに居るのは明白。確保が前提のばかばかしい追いかけっこをしている内に怒りも醒めてしまった徹だったが、ギャラリーに登っているところを教員に見られてもまずいので降りるよう言うつもりでいた。

「おい遠藤、降りるぞ。見回りの先生に見つかったら怒られるんだからな」

肩ぐらいの位置を見極めて手を伸ばすと、くるりと回ってそれを躱す。面倒臭いと思いながらカーテンを解くと、逆にカーテンの中に引きずり込まれた。

「わっ！　おい、なにすんだ……は、はくしょん」

普段使われないこともあって埃が舞う。徹はくしゃみをしながらカーテンから出ようとする。けれど、澪に逆に掴まれた。

「ん？　なんだ？」

「へへ……ねえ、徹、ちょっといい？」

「何が？　って、おい……！」

答える間もなく股間に触れる澪の手。それは明らかにあの場所を狙っての行為。

「あれ？　勃起してないね。どうして？」

「どうしてって、そりゃお前……、とにかく、ふざけるなら怒るぞ」

「なんで？　ねえ……」

強く言ったつもりが彼女は意に返さない。それどころか調子に乗ってぺたぺた触り始める始末。強く握られたり抓まれるわけではないが、捻り方のせいで陰嚢に鈍い痛みが訪れた。

「いた！　おい、やめろって……やめ……痛いっての！」

焦りを含む徹の声に澪も察して手を離す。

「ごめん、痛いんだ……」

「ったく、あのなあ、ここは男にとって大事なとこなの！　保健で先生も言ってたろ。陰嚢ってのは臓器なんだから、腕とかと違って下手なことしたら命にかかわるんだぞ？」

「そうだったんだ……。ごめん……ふざけてて……」

しょんぼりする澪に徹はほっとしていた。性格も明るくお調子者なところのある彼女だが、こういう素直なところもある。そこが彼女の男子受け良いことの理由だろう。

「ほら、もう行くぞ。先生来る前に下りないと」

「だって、徹……。さっき直美と……」

「ん？」

「トイレでオチンチンさわって遊んでたじゃん」

「なっ……」

徹としては遊ばれた記憶こそあれど遊んでいたつもりはない。それ以上に、あれを澪に見られていたとは思わなかった。

チンポを弄られて気持ち良かったことで周囲への意識が散漫になっていたのかもしれな

い。だとしたら、澪以外にも……。
オナニーという言葉はよくわからなかったが、端的に言えばエッチな行為だと察しがつく。それを女子と二人で密室に近い状況でしていたとしたら……。
「あれはそういうわけじゃ……。その、なんだろ。女子に見られて変な気持ちになったからだって。俺にはまだそういうの早いって。わかるだろ？　俺はクラスでも一番のチビなんだし……」
とにかく誤魔化そうと適当な言葉を羅列する。澪は素直な反面、疑問に関しても素直に尋ねてくるから反論を与える隙を作ってはいけない。そう考えた。
「でも、徹って先生たちみたいな大人のオチンチンなんでしょ？　じゃあ、そういうことできるんじゃないの？」
「ならねーよ。ほら、お前だって女子だろ？　お前に触られて何ともならないんだぞ？　じゃあまだなんだよ」
「でも、あたしもチビだし……」
「チビはお互い様だ。お互いそういうのが早いってだけだろ。ほら、もう戻ろう。菅井も心配してるぞ」
「ん～、あたしって直美みたいにぼいんぼいんじゃないもんね。しょうがないか……」
はぁとため息をつく彼女はがっかりしていた。彼女も彼女なりに男子への性が気になっているらしい。それはこの前のお寺での合宿の頃からかもしれない。
「ほら、帰るぞ。な……」
「うん。ごめんね。変なことばっかり言って」
「いや、まあなんだろ。そういうの疑問に思うもんだろ。お前も俺もな。ただ、そういうのはちゃんと知ってる人に聞かないとな」
「だれ？」
「そうだな……、やっぱり保健のことだし井沢先生じゃね？」
少し考えてあげたのは養護教諭の元治。人当たりが良く、他の教員に比べて若いので適任に思えた。担任の堅物先生、一組のセクハラっぽい先生、神経質な志垣隆の選択肢だとそれが無難だと考えた結果だ。
「ふーん。そっか。そだね。男の子がどうすれば勃起するのかとか聞いてみよっかな。なんてね、えへへ」
「おいおい、まだ懲りてないのかよ」
「ふふーんだ。だって、なんか悔しいじゃん？　直美は徹のこと勃起させられて、あたしはできないなんてさー。女として魅力ないってことじゃん？　ムカツクじゃん」
「なにいってんだか……」
彼女なりに女として嫉妬しているらしくほほえましい。だが、直美のような良い身体の子に比べると澪の魅力はほとんどない。仮に勃起の生理的メカニズムを理解したとして、彼女如きに性的な興奮を覚えるなどと、と徹は内心可笑しかった。

「徹？ 」
「ん？ なんだ？ 」
だが、ここで笑ってはまた最初からやり直し。背中を向けると笑いをかみ殺して ハシゴを降りることにする。
「よいしょっと…… 」
ゆっくり ハシゴを伝 って下りていると、澪も降りてくる。
「おい、二人同時に降りるなよ。書いてあるだろ 」
「いいじゃん。あたしと徹ならそんな重くないし 」
「そういう問題じゃ…… 」
上を見ると近づいてくる澪のお尻が見えた。
赤いブルマでぴっちり締め付けられているけれど運動をしていることもあって肉付きは良い。胸は平べったいのにお尻は丸くてキュート。それがふりふり降られながら近づいてくると、視線はおのずと向いてしまう。
「んしょ、んしょ…… 」
だんだん近くづいてくるそれは大きくなり、よく見るとパンティがはみ出ている。普段なら指で直すのに、今日は男子の目が少ない事もあって油断しているのかもしれない。
「ん？ あれ…… 」
「うわ…… 」
目の前で揺れるお尻に気を取られて下りずにいたら、彼女のお尻が顔に押し付けられる。きつめの汗の匂い、柔らかいお尻の弾力を顔で受ける。徹は思わず息を飲むと、女の子の匂いを吸って酩酊に近い困惑を覚える。
するとふらっとしてしまい、ハシゴからふらっと落ちそうになる。慌ててハシゴを掴むとぐらっと揺れる。
「きゃっ！ もう、徹、脅かさないでよー 」
急な揺れにハシゴにしがみ付く澪。お尻がさらに下がって徹の顔に擦りつけられる感じになる。
「むぎゅ……って……おい……おちつけよ…… 」
酸っぱい匂いがする。かなりきつめ。同時に顔を中心として熱くなり、股間が痛くなる。
「おちつけ、ゆっくり降りるから……おちつけ…… 」
徹はお尻の柔らかさを顔で感じながら、ゆっくりとハシゴを降りた。
「……もう、徹のバカ。脅かさないでよ…… 」
「お前がマナーを守らないからだろ。一人ずつって書いてるんだからよ 」
降りて来た澪に手を貸して着地させ、軽く頭を叩く。
「もう、澪ったら 」
「ごめんっち～ 」
麻帆と千夏に軽く頭を下げて帰りの準備を始める。そろそろ日も沈み始めて夕暮れの赤が

映える。後片付けも終わり、残った面々も帰り道に着いた……。

＊＊

帰り道、徹はいつになく早足だった。これが真奈となら普段のことを話してゆっくり歩くのだが、今日は少し違う。なぜなら隣に居るのが千夏だから。

「ねえ、足早くない？」

「んなことねーよ」

彼女とは家が近くて登校グループも一緒。なので一緒に帰ること自体はおかしくない。ただ、今日は妙に一緒に居たくない。彼女と話していると、また先ほどのようなことになりそうで嫌だから。

「いたっ……」

「ん？　どうしたんだよ」

振り返ると千夏が足を抑えていた。練習のし過ぎか、足を挫いたのだろう。千夏はよろめきながら立ち上がると、近くの壁に手を付く。

「おいおい、大丈夫かよ」

「ごめん、なんか足が急に引きつってさ……。なんでもないよ。少し休めばいいし」

「こんなところで休むってないだろ。しょうがねーな。肩貸してやる……」

言いかけて止まる。肩を貸す事になれば身体が密着してしまう。そんなことになったら、またチンポが苦しくなる……。

「ほんと？　ありがと。ごめんね、今日は無理言って手伝ってもらったのに、足くじいちゃって……」

だが、既に彼女に聞こえていた様子。足を引きずりながら肩を借りて来る。

同時に千夏の匂いが鼻にかかる。すっとした香りは清涼スプレー。汗ばんで湿ったいシャツが触れ、肌の温かさが感じられた。

柔らかい。ふっくらとしている。澪に比べて胸も膨らみがあり、シャツの裾からちらりとオレンジの布が見えた。一丁前にブラジャーをしているようだ。

それを見た瞬間、彼女も相応に女らしい身体付きになっていることに気付く。そして、自分もまたそれを意識してしまうこと。すなわち……。

「おい、少し離れろよ」

身体が触れ合う恰好になることを恐れて突き放そうとする。けれど彼女は寄りかかるよう倒れ込む。

「ちょっと、急に押さないでよ。倒れちゃうでしょ……。もう、何照れてるのよ。あ、もしかして意識しちゃってるとか？　あはは。あんたもいっちょまえに男なつもりかしら？」

「しょうがねえだろ。こんなとこ見られたら誰になんて言われるか……」

「ふーん、あたしと噂になると困るんだ？　じゃあ、誰ならいいの？　やっぱり真奈？」
「おい」
最近、やたらと真奈の名を出す千夏にむっとしてしまう。そんなに真奈のことを自分が意識しているのだろうか、自分自身見直すべきかもしれないとすら思える程だ。
「あは、図星？　そーなんだ。やっぱり徹ってああいう胸の大きいのが好きなんだ」
「別にそんなんじゃねーよ。ただ、アイツとは幼馴染だし」
「幼馴染って、学校の子みんなそうじゃないの？　真奈だけ特別？」
「それは……、だから、なんだろうな……」
彼女の言うとおり、鬼瓦校に通うほとんどの子は幼馴染。
地元の有力者の家だと下々の子と遊ばない、姿を見せない子も居る。そして単位面積当たりの人口比を考えれば広く分布しており友達になれるほど一緒に遊ぶ子にも偏りができやすい。
徹も幼稚園前までは真奈と健介、佑樹ぐらいしか村に居ないと思っていた。
千夏と顔を合わせるようになったのも鬼瓦校に入学して区での催しに参加するようになってから。だから真奈たちに比べて幼馴染という感覚が少ない。
「まあいいや。でもさ、あたしだって、少しずつだけど……そうなってるんだよ？」
「ん？　何が？」
「だからさ……」
ふっとしなだれかかり、向き合う格好になる千夏。ふと胸に柔らかいモノが押し付けられる。それは意識することでようやく理解できる程度のモノ。とても直美や真奈とは比べられないが、ゼロではない確かなモノ……。
「どう？　ドキドキする？」
「え……お、おい……」
「さっきさ、直美と一緒にトイレで何してたの？」
「なにも……」
「徹、焦ってたよね？　ねえ……」
「いや、だから……」
「どこ、触ってたの？」
「それは……」
「ここ、悪戯されてたんでしょ？」
短パンに触れる手が内側を目指す。しかし彼女にも戸惑いがあるのか内腿で留まる。
「やめろよ。そういう冗談……」
直美に比べればずっと性的魅力の薄い千夏の身体。けれど女を意識させられる程度の柔らかさ、甘い香りがする。
じっと見つめる千夏の瞳はいつものきつい視線ではなくやさしさのあるもの。唇はきめ細やかで赤く柔らかそう。自分はひび割れているというのに。

「ね……」
瞬きもできずにじっと見つめ合う二人。話す度に吐息が感じられる。
自然と胸が高鳴る。きっとお互いに伝えあっているはず。うるさいほどに。
「おい……」
離れろなどと言えない。もう少しぐらい、このままいたい。千夏のことが好きだからではなく、ただ、自然と湧き出る興味のせい。それは不誠実だけれど、それでも……。
「なに？」
くすっと笑う仕草が可愛いと思った。いつもなら男子相手に調子の良い事言って頭をおさえたがるのに、こんな時だけ媚び入る上目使い。唇が開いた時、ドラマならこのままキスをするのだろうとすら思えた。
「ぷっ！　くくく！　あはは！」
「な、なんだよ……急に」
笑いだす千夏はすっと離れる。思わず追いすがろうと手を出し、それも笑われた。
「あはは、ちょっとからかったらすーぐ本気になってさ！　ばっかじゃない？　やっぱり徹ってむっつりスケベだね。だから直美なんかにすぐ騙されるんだよ。これでわかった？徹は女の子に気を付けなさいね」
「おい……足平気かよ」
「ぜーんぜん？　っていうか、そっから騙されたんだねー、徹」
足を挫いたのは嘘だったのか、千夏はすたすたと歩きだす。
「なんだよ、ったく、お前、せっかく心配してやったのにさー」
「そっちこそ。あたしのこと抱きしめて嬉しかったんじゃないの？」
「なにが！　汗くせー女なんて御免だね」
「ふーん、そ？」
「……」
「徹、勃起してたよね？」
「な……」
身体は正直であり、去り際に触れられた感触も覚えている。図星をさされた徹は羞恥に真っ赤になっていた。
「くっそー、ばかにしやがって！　お前なんて知らん！　どこにでも行け」
「はいはい……。そんじゃあたしはこっちだから帰るねー」
「ああ、帰れ帰れ！　ったく、女ってのはこれだから……」
よいように使われたり騙されたり、女に関わると碌なことがないと徹はぷりぷりしながら帰路に着いた。
その曲がり角で暫く胸を抑えてしゃがみ込む千夏が居ることなど知らずに……。

＊＊

土曜日はあいにくの雨。午後にかけて日が差し始めたが、鬼瓦公園の地面は泥だらけになっている。そんな中で練習をしたらぬかるみに足をとられて転ぶだろう。

「おーい、智樹、すまんがこの雨だから今日は俺、練習いけないわ 」

「えー、それは残念っすねぇ 」

智樹の教室へ行き、中止を告げると彼は思った以上に項垂れていた。そんなに練習熱心だったと思うと、また体育館の端っこを使わせてもらえないかと考える。ついでにこの前の事を春樹に謝って、友好的な形で借りる形にしたかった。

「でも、体育館借りられるかもしれないから、もし暇なら来いよ 」

「体育館っすか？ そんじゃ今野先輩は来るんですか？ 」

「ん？ 真奈が？ 真奈はどうだろう。来るかな。声かけてみるよ 」

「そっすか。お願いしますね。絶対ですよ。先輩、もしかして今野先輩に恰好悪いところ見られるの嫌だから呼ばないかもしれないし～ 」

「あ？ なにいってんだ。今んとこ俺の方が勝ち越してるんだからな。お前こそびびって逃げるなよな 」

後輩の軽口に向きになる徹。背丈の都合上、同級生の喧嘩にしかみえず、他の後輩も別のクラスの子が来た程度にしか思わなかった……。

教室に戻ると閑散としていた。雨も弱くなったところで皆帰り始めたのだ。挑発された手前、真奈に一声かけようとしたがいない。代わりに佑樹がまだ帰り支度も半端にもたもたしていた。

「真奈？ どこ行ったんだ？ 」

「ん？ 真奈なら……知らないな。どっか行ったのか？ 一緒じゃないのか？ 」

帰り支度を終えた健介が引き返してやってくる。

「いや、さっきゴミ捨て行ったらいなくて……。まあいいや 」

真奈を呼べないとなると智樹の言うとおりみっともない所を見られたくないように思われかねない。そうなると練習試合の無いように関わらずどうにも都合が悪い。

「お、そうだ。そんなら千夏を呼んでくりゃいいか。あいつだって女だもんな。うん、そうしよう 」

「……探そうぜ。ほら 」

すると健介が徹を急かす。妙にそわそわしていた。

「いいよ。そこまでしなくても……。っていうか、なんだよ皆、真奈真奈って…… 」

「いいから行くぞ。ほら 」

健介に促され徹は真奈探しのついでに三組へと向かった。

……が、彼女も既に下校済みだった。
「……」
代わりに居たのが中村昭利。彼とは特別親しいわけではないが、険悪というわけでもない。スポーツマンでサッカークラブに所属していて、同じチビ同士、共感するところがある。少なくとも例の一件までは……。
新作水着のモデルの時、昭利が大輔と喧嘩しているのを見た。自分も真奈を待っていて、そのことでひと悶着あった……。

それは例の土曜の午後の事……。

「お前、何してるんだ？」
「何って……？　別に？　真奈いないかなって思って……」
やたらと喧嘩腰で尋ねて来る昭利に徹も身構えてしまう。
「お前こそなにしてるんだよ。なんか用か？」
一緒に居た健介は不審そうに尋ね返す。むしろ徹の方こそ健介が不機嫌な理由が知りたかったぐらいだった。
「お前ら、もしかして明日香のことを……」
「明日香？　誰だっけ……？」
「沢森さんだろ。確かそんな名前だったよ」
同じクラスになったことがないせいか記憶に薄い。同じ学校に通うといえど村内の子を集めているためか、家が遠いと１０キロ単位で離れていて会うことも無い。
「やっぱりお前、明日香になんかしたのか？」
明日香の名前を出した途端、昭利は健介に詰め寄る。
「おいおい、おちつけよ。何があったんだって。お前、どうしたんだ？　いきなり……」
「お前こそ、最近なんかこそこそしてたじゃねーか。この前だって体育倉庫に勝手に入ってたじゃねーか」
一方、健介の方も妙に喧嘩腰で構えていた。その様子に一人取り残される徹はとりあえず二人を止めようと割って入る。
「やめろって、お前ら。何があったのかしんねーけど、とりあえず離れろ」
二人を引き剥がして間に入る。それでもお互いにらみ合い、今にも一触即発だった。
「おい、健介。どうしたんだ？　中村となんかあったのかよ？」
「なんもねーよ」
「じゃあ、中村、お前は健介に何かされたのか？　違うだろ？」
「ねーけどよ……」
「沢森さんがどうかしたのか？　俺も健介も沢森さんとはなんもねーぞ？　ホントだっ

て。俺らの家は鬼首台だし、お前らは瓦丘だろ？　会わないっての 」
まるで猫の縄張り争いのような感覚になりながら徹は昭利を諭す。少しは落ち着いたのか、昭利は視線を落した。
「んで？　沢森さんがどうしたんだ？　黙ってちゃわかんねーぞ 」
「最近、付き合いわりいから……、気になって…… 」
「……なんだそれ？ 」
「なんかあったんだ。あいつが急に俺から…… 」
「おいおい、そんなのお前の…… 」
もしかしたら明日香のストーカーなのかも？　と思い始める。片想いがこじれたまま行動して気持ち悪がられて関係が悪化。その結果、少しでも気になる相手に喧嘩を売っているのかも……。
「なんだ？　チビどもが集まって？　少しは背が高くなる相談か？　つつましいな。ママのおっぱいでも飲んだらどうだ？ 」
そこへさらなる火種の緒方大輔がやってきた。彼はあからさまに三人を、特に昭利を侮蔑していた。
「うるせえな。なんの用だよ 」
「あ～？　どうせあれだろ？　明日香ちゃんの水着姿を盗み見しにきたんだろ？　このスケベ 」
「お前じゃねーんだよ 」
「あっはは、じゃあなんだよ？　明日香ちゃんはお前に待っててって言ったか？ 」
「…… 」
「言われて無いんだろ？　図星だろ 」
「うるせーな 」
「はっは！　まじうけるんですけどー！　なに？　待っててって言われてねーのに待ってるとか、お前まじストーカー？　だね？　片想いこじらせてきもい！　まじきめーんだけど。お前らもそう思うだろ？　違うか？ 」
話を振られて徹も健介も口を閉ざす。二人ともあながち大輔の話が間違っていないような気がし、一方で彼の態度が傷口に塩を塗りつけるようで頷くこともできなかった。
「そうか。お前らも同じか？　誰の事ストーキングするつもりだ？　なあ、誰だ？　ああ、今野か。だよな。あいつおっぱいでかいもんな？　俺新水着の真奈ちゃん見たけど、すっげーよ？　おっぱいプルンプルンだし、あれ触ったら気持ちいいだろうなあ？　なあ？　触ったことあるか？　おっぱい。ねーだろうな。お前ら童貞だもんな 」
「お前だってそうだろ 」
「うっせーな。つか、お前さ、ほんとに明日香ちゃん待ってるのか？　じゃあなんで明日香ちゃん、裏口から帰ったんだ？　さっきさ、お前がここで待ってるの見えたんだよなあ。そしたら急に帰ったぞ？　お前さ、明日香ちゃんに嫌われてるんじゃねーの？ 」

「そんなこと……」
「そうだろ？　何かって言うとお前、明日香ちゃんにくっついてっけどさ、本当は嫌だったんじゃないか？　サッカーの試合にも応援来てくれないんだろ？　皆から囃し立てられるのも嫌なんじゃないの？　家が近いってだけで仲良くさせられて、周りからの同調圧力？　そのせいじゃん。明日香ちゃん、性格良いしなあ」
「……なのか……」
思い当たる節があるのか、昭利は奥歯をぎりりと噛み、項垂れるのみ。
「じゃあさ、今からでも追いかけて聞いてみろよ。ま、お前みたいなストーカー野郎じゃそんな勇気もねーだろうけどな。なんせ真実が怖いもんな。明日香ちゃんの気遣いっていうオブラートに守られて過ごしてろよ」
「くそ……！」
返す言葉も無く、確かめたい気持ちに突き動かされて昭利は裏口へと走り出す。
そんな彼の雰囲気から明日香に追いついて何をしでかすかわからず、徹と健介は追うことにしたのだった……。

結局は明日香に会えずじまいで帰路に着いた。

その途中で聞いたのは、最近明日香の様子がおかしいということ。それは彼の思い込みかどうかわからず、徹は適当な相槌を打つしかできなかった。代わりに健介は妙に頷くところがあり、気になるなら気のすむまでやれとすら言い切る。
それが火に油を注がなければ良いのだが……。

――そんないきさつがあり、徹は昭利のことが少し苦手意識を抱いていた。
「……なんか用か？」
「あ、いや、その、萩が居ないかって思って……」
「萩さんなら着替えて体育館行ったぞ。今日ってバレー部の試合なのか？」
「さあ、なんだろうな。知らないや。ありがと、教えてくれて」
謝意は忘れないでおく。そうしないと何が引き金になって沸騰するかわからないから。
「ん？　あれ、お前、サッカーは？」
尋ねておいて余計なことを聞いたと心の中で舌打ちする。今日は午前中からサッカー部の試合がどうのと言っていたのを聞いており、今もここに居るサッカー部員はつまり補欠……。
「ああ、そうだな……、行かないといけないのにな」
てっきり怒るかと思ったら逆にしょげている。面倒な展開にならなくてほっとしたけれど、それとは別に心配になる。
まさか失恋の次はやる気の喪失からの鬱状態に陥るのかも……。

「おいおい、しょげてる場合かよ。スタメンじゃなくても応援してこうぜ 」
「なめんなよ、俺は今日スタメンだ 」
「え？ ならなおさら急げよ。なに油売ってんだ。ほら、ほら 」
昭利はまだ煮え切らない様子で帰ろうとしない。
「ほら、行けよ。せっかくスタメンなら急ごうぜ 」
「おい、押すなよ、行くから…… 」
まるで低血圧で起きられない駄々っ子のようにもたつく昭利は、やはり明日香の事が足を引っ張っているのだろうか？ 徹は少しでも彼を元気づけようと引っ張った。
「あき……中村君、どこへ行くつもりかしら？ 」
すると今度は綾子がやって来る。彼女はなぜか体操着姿だった。
正直面倒なのが現れたことに徹は頭が痛くなる。どうしてこう、綾子は余計な場面に顔を出したがるのか……。
「今からこいつ、サッカーの試合なんだよ。用があるなら今度にしてやれ 」
「あら、御挨拶ね。大方彼女さんが応援に来るからやる気満々って所かしら？ 」
「彼女？ 」
「聞いてないの？ さっき沢森さん、応援の準備あるって急いで帰ってたわよ？ 鬼瓦高原運動場でしょ？ 」
「まじか？ なんだよ、良かったじゃん 」
「あ、ああ…… 」
思っていたストーカー像とは別の雰囲気に徹はほっとしながら昭利の背中を叩く。少し強めだったせいか、彼は呻いていたが、すぐに頬を叩く。
「よし、やる気出た。行くぞ！ 今日はスタメンだ！ 誰が鬼瓦FCのエースか、見せてやる！ 」
「吉岡君じゃないの？ 」
「うっせー！ 俺は行くからな。お前の探偵ごっこの真似事はまた今度だ 」
「探偵ごっこ？ 」
「探索ごっこよ。わたし、この村のことよく知らないから案内してもらってるの 」
「ふーん 」
都会っ子の綾子がこの村に興味を持つとは思えず、意外の一言だった。
昭利は荷物を片づけると急ぎ教室を出る。先ほどまで腐っていたとは思えない変わりようだった。
「なんだ、思い違いだったか 」
「何が？ 」
「あ？ ああ、そのアイツと沢森さんだよ。ストーカーなのかなって思ってたけど、違うんだな 」
「さあ？ もしかしたらストーカーかもよ？ 」

「おい、怖い事言うなよ 」
「ふふ、冗談よ……でも 」
「ったく、笑えない奴だな 」
これ以上綾子にからかわれる気も無いと、徹も教室を出た。いくらなんでも綾子相手にバドミントンの試合に来てなどと頼みたくなかったから……。
「志垣先生と一緒だったわね。車で送ってもらうのかしら？ 」
なので綾子の呟きなど耳には届かない……。

＋＋

千夏が体育館へ向かうと、既にコートが用意されていた。
メンツは千夏と澪、麻帆の三人。他の子達はやはり来なかった。
「お待たせ……。ふう、やっぱみんな来ないか……。しゃーないわね 」
「あ、千夏ちゃん。うん。なんだけど、えと 」
コートの向こうでは春樹が腕を組んで仁王立ちしていた。その表情は自信に満ちている。その理由は後のメンバー。吉岡雄二、畑中裕也、緒方大輔、浅木亮だから。
皆背が高く、運動神経が良い子達ばかり。特に雄二はサッカー部のエースと噂され、浅木亮も鬼瓦アイアンズで三番バッターとして活躍している。
二人に比べれば見劣りする裕也と大輔も背は高く、前のボンクラ達とは大違い。今も試合前のトス、レシーブを綺麗に繋げている。
「前とメンバー違うじゃん！ ズルイ！ 」
「ズルイ？ 何がだよ。前の奴らは今日都合が悪いんだ。だから他の奴誘ったんだ 」
「なに言ってるのよ。っていうか、吉岡君はサッカーの試合じゃないの？ なんでここに居るの？ 」
「雨じゃん。俺、泥だらけでサッカーしたくないし 」
泥臭さを嫌う彼らしい態度。顔は良いけれどどこか不良な面があり、千夏は彼が苦手。
「でも、これじゃあ試合に……。こっちは三人だし…… 」
「前は二人だったろ？ いいじゃん。今回は一人多いぞ？ 」
「そっちのメンバー運動神経良いし、これじゃこっちがハンディありすぎだわ 」
「そんじゃあ佐原が居るじゃん 」
「え？ 佐原さん……？ 」
なぜか裕也に促されて佐原みなみがおずおずと顔を出す。
「うん、えと、なんか試合するから手伝ってって言われて……それで、でも、私じゃ足ひっぱるから…… 」
「しょうがないじゃん。3人じゃ嫌だって言うし 」
千夏からするとみなみならいない方が良い。彼女は性格も運動神経的に不向き。それに加

えてあのおっきなおっぱい。今日はブラジャーをしているが、それでも邪魔だとはっきり言える大きさだ。
「でも四人でしょ？　ねえ、やっぱり今日は試合……」
「後二人？　なんだよ、せっかく来たのに……。じゃあ、俺と裕也が外れて……」
バレーの経験の少ない大輔は素人丸出しの裕也を指名して抜けようとする。
「お待ちなさいよ」
すると戸が開いて綾子が顔を出す。背後には最近徹と一緒にバトミントンをしている後輩の子と真奈。
千夏にとってみなみ同様いらないメンバー。特に真奈はメンバー的にも、個人的にも……。
「こんなの勝負にならないわ。今日は中止。ちゃんとバレー部のメンバーで集めてきてよ。そうじゃないとフェアじゃないわ」
「そっちだってバレー部じゃない奴いるだろ？　いいじゃん」
「それとこれとは……」
「萩さん、今更になって約束をたがえるのはよくないよ。春樹の話聞く限り、君の方にも非がある」
一組のクラス委員、浅木亮は生真面目な意見を差し込み千夏の反論を封じる。
「でも、そんなのって」
「春樹も練習の時間が欲しいんだ。それなのに君と高杉君の我儘に付き合ったんじゃないか？　だったら今回は彼の我儘を聞いてやってお相子だと思うんだ」
「……」
どこかずれているが普段から真面目で通っている亮に言われると正論に聞こえなくも無い。他のメンバーを見るも皆しょうがないという顔付きで、千夏も唇を噛むしかない。
「いいじゃん、ちなっちゃん、勝っても負けても楽しくだよ。それに何も頭から食べちゃうわけじゃないんだし、たまには高尾に花もたせてあげるっていうか、練習手伝うぐらいだしさ」
お互いのメンバーを見て負け濃厚を悟る澪は元気づけようと明るく振舞う。
「そうだよ、千夏ちゃん。私も男子バレー部とはちゃんと話し合うべきだと思うし、今回はこれで手打ちってことで、これをきっかけに仲良くしたほうがいいと思うの」
真面目な麻帆もこじれた男女バレー部の関係を改善しようとしたかった。
「うー……、わかったわよ。元はと言えばあたしの巻いた種だし……。でもね、高尾、いっとくけど、これが女子バレー部の実力だと思わないでよね。いい？　今回ぐらいは譲ってあげるけど、次はないんだから」
「あらあら、始める前から負け戦？　やるからには勝つっていう気概は無いのかしら？」
空気を読まない綾子の言動に、千夏はお前も原因の一人だと言い返したくてたまらなかった……。

土曜の午後は換気の為に体育館の上の窓を開けることになっているが、雨の日は閉じたまま。窓ガラスにはライトの明かりが反射していた。
トーン、トーンとボールの弾む音が響く。本来なら今日は男子バレー部の練習の日。いつもなら寄せ集めのメンバーで練習をするのだが、今日は違う。スポーツマンの助っ人を集めた上で女子バレー部と対決に臨むのだ。
「おー、こんな感じかー」
スポーツマンの雄二は数分でトスの要領を覚え、裕也相手にスパイクの真似事までしていた。その他のメンバーもとりあえずボールに追いつく俊敏性を見せている。
対し女子チームは前途多難。女子バレー部の三人はともかく、幽霊部員の綾子はボールを拾おうとする気すら見えない。みなみはもとより運動オンチで、真奈も身体が大きいぐらい。真上でもいいからボールを上げられたら良いという内容だった。
「……」
サーブの動作を見る限り、へろへろなボールを相手コートに届けるという程度。攻撃は期待できそうにない。
「とにかく、女子バレー部の底力を見せるわよ！」
「おー！」
相手の空気にのまれまいと、千夏は声を張り上げて勝負に臨んだ……。

＋＋

鬼瓦高原センターのグラウンドでは近隣地域のサッカークラブが集まり、総当たり形式で試合を行っていた。
試合自体は夏までの数週間をかけて行い、勝ち点を競って最終結果を決める。優勝、準優勝は県大会へと進むことができる為、序盤といえど気は抜けない。
泥だらけのグラウンドでボールを追いかけて走り回るメンバー。足をとられ、ボールの跳ねる勢いも悪く、動きが全体的に悪い。
そんな中、泥まみれになりながらフィールドを走る選手が居た。
ミッドフィルダーでスタメン出場した中村昭利。彼はボールを集めると対角線に上がっていたフォワードの源栄一にボールを上げる。
普段はぼんやりしていることの多い栄一だが、今日に限って鋭く細かく動いてくれた。
本日3度めのショートパスはディフェンスの頭をギリギリ越えて栄一の元へ行く。彼はタイミングを合わせてゴール目掛けてシュート……。ぬかるみに足をとられたキーパーはかろうじて伸ばした手でボールを弾く。だが、キャッチには至らず、転がり続ける。
「くそ……！」
上がろうとする昭利だが前を阻まれる。絶好のチャンスなのにと思っていると、彼の背後

をさらに越えて突っ込む者が居た。
「うおおおお！！」
ディフェンスのはずの川島誠。普段はのっそりしていて練習の時もぱっとしない。それなのにこんな小雨混じりの中、フィールドを上がっており、そのままこぼれたボールに突っ込んでねじ込んだ。
「ピー！」
得点の合図を見せる審判。昭利は間一髪、得点につなげられたことに安堵した。
「よーっしゃー！！」
本日初得点に吠える誠。いつになくやる気満々なことに暑苦しさを感じつつ、それは自分も同じだと笑えてくる。
「ふぅ……、ナイスシュート。戻るぞ」
「おお！　任せろ！」
いつになく奮起しているのはなぜだろう？　コンディションが悪いせいで主力に怪我させまいという配慮からのスタメン起用に奮起したのかもしれない。
もう少し上がるのが早かったらおこぼれゴールは自分のモノだったのに。そうすれば明日香に語り掛けるきっかけも作れたはず……。
「ナイスアシスト。決められると思ったんだがな」
上がって来た栄一が昭利の肩を叩き、ループパスを労ってくれる。
「お、ああ、うん。次は頼むぞ」
「任せとけ」
普段から一人でいることが多い栄一が自分から話しかけてきて、さらに感謝を述べることが意外だった。仏頂面で何を考えているのかわからず、試合の時も雄二に比べて全然活躍しようとしていない彼だから……。
だが、今日の動きを見る限り、パスターゲットになりやすいようマークをかいくぐって動いてくれる。仕事人。そういう印象を受けるプレイヤーだった。
「へへ」
いつもに比べてのびのびプレーできる。そう感じられる試合展開だった。

＋＋

一セット15点、二セット先取りで勝利の時間短縮ルールの中始められた試合は序盤こそ一進一退の良い勝負だった。
男子チームは試合なれしておらず、時折お見合いしてボールを見逃すことが多い。が、そのチャンスもみなみのぼんやりしたサーブのせいで続かない。得点できるという時に攻めが続かない。
序盤こそ点数を稼いでいたけれど、徐々にラリーが続きだし、そうすると体力で勝る男子

が点数を稼ぎ始める。特に穴と思われていた後輩の男子、篠原智樹が意外にも動きが良い。彼は果敢にボールに飛び つき、ピンチを救 ってチームを盛り上げる。
その結果、逆転を許し、一セット取られてしまう。
「いぇーい！」
逆転勝利で沸き起こる男子チームとは対照的 に負けを予感し始めていた女子チームは冷ややか。
ミスを連発するみなみと真奈、そもそも参戦する つもりすら見せない綾子をメンバーに加えては勝負にならなか った。
「あーあ、負けちゃった。が っかりね。強い強い って言われてるわりに男子相手じゃこのざまなんだ」
女子メンバーの神経を逆なでする綾子。彼女も女子バレー部の一員のはずなのに……。
「あんたねぇ、あんたも部員なんだからやる気見せなさいよ！」
さすがに苛立った千夏はかっとなって掴みかかる。
「あらあら、負けたからってメンバーにあたるの？ やめなさいよ。八つ当たりはさ」
「ふざけないで！ あんた、さっきから取れるボールも取らないで、やる気あるの？」
「ないわ。こんな負けるゲーム。ま、別に負けてもどうでもいいし、ねえ、どうするの？ まだ続けるの？ どうせ君達の勝ちだよ」
さらに煽り続ける綾子に勝利に湧く男子チームも醒め始める。
「ふ、ふん！ その手には乗らないぞ。ちゃんと最期まで勝負するんだ。おら！ 二セット目やるぞ！」
「どうせ勝 っても負けてもやることなんて掃除当番レベルでしょ？ つまんないわ」
「ん～、それはそうかな。じゃあさ、こういうのどう？ ハンデで俺ら４人でやるよ。んで、先に五点取られた方は相手に ハンディを求められるってことにしないか？」
雄二が提案する。四人になれば 一人一人の体力消費こそあがるけれど、動き易さと休憩を取れることでそれほど ハンディと思えない。むしろ女子チームの穴をふさぐこと の方を提案したかった。
「ふーん、それでいいんじゃないの？ でも、ハンディは何？」
「ん？ それはこれかな。ジャーン。重り」
雄二はリストバンドと足に着ける重りを見せる。
「足の重りはわかるけど、リストバンドは？」
「リストバンドはこうや って重りと繋げるんだよ。そうすりゃ ハンディになるだろ？」
重りとして書道に使う分銅をいく つか見せる。試しに装着したところ、確かに重さがあって動きづらかった。
「ふーん、ハンディ戦ね。これなら少しは勝負になるんじゃないの？ じゃあ、続けましょうか」
相談もせずにさ っさと話を進める綾子。千夏が文句を言おうとしたところで既に男子達は

コートに位置どる。
「千夏ちゃん。ね、がんばろ 」
人一倍頑張ってくれた麻帆は汗を滲ませながら促してくれる。真奈も序盤より動きが良くなり始めているし、みなみも極力試合に絡まないよう後退してくれている。考えようによってはチャンス。序盤の5点でハンディをもらえるのであれば、それがきっかけで勝てるかもしれない……。
「よし、いくぞー！ 」
「うん！ 」
千夏は自分を鼓舞してコートへと向かった……。

＋＋

前半を終えて水分補給する面々。
誠は自分のゴールを大げさに語り、周りも勝利の予感にそれをほめたたえていた。
ただ、昭利や他のスタメンからすると、本来のポジションを捨てて前に出すぎた彼を称賛するのは抵抗がある。たまたまゴールしたから良いモノの、もしカウンターを受けたらどうなっていたか？ 誰も口にこそしないが眉をひそめてしまう。
「昭利、頑張ったね 」
「……明日香…… 」
タオルで顔を拭いていたら、明日香がやって来た。レインコート姿の彼女は笑顔とスポーツドリンクを携えていた。
「なんだ、来てくれてたんだ。はは、来ないと思ってた 」
「なによ～、来てほしくなかったわけ？ あー、そうよね。あんた、結局シュートできなかったし、川島君の方がかっこよかったし～？ 」
「俺はミッドフィルダーなの。シュートは栄一か、よし……おか？ 」
今日はフォワードの吉川雄二が居ない。そのせいで変に突進するスタンドプレーが無く、堅実な試合運びになっていた。
普段はエースを気取る雄二なのに、こういう悪天候の日は来ないことが多い。おぼっちゃまらしいといえば納得もいく。
「ふーん？ でも川島君もディフェンスでしょ？ 昭利ももっと前に出なくていいの？ 」
「ボールに群がればいってもんじゃないんだよ。休み時間のサッカーじゃあるまいし 」
「ふーん 」
「沢村さん、さっきのは中村のアシストで得点圏までボール運べたんだ。あれは褒めて良いプレーだったよ 」
話を聞いていたのか石川拓馬がスポーツドリンクを飲みながら口を挟む。

もと鬼瓦アイアンズで活躍していた彼だが、なぜか去年になってから鬼瓦FCに参加していた。理由を聞くと　「坊主が嫌だから」　と言われた。正直、ナンパな奴という印象があった。だが、その実力は十分であり、まだ経験の差のせいもあってベンチスタートが多いが、準スタメンと言える実力だ。

「お前こそもっと頑張れよ。せっかく翼も応援にきたのにさー」

わざわざ応援に来ていた飯倉徳夫は拓馬の肩を叩きダメだしをしていた。

「拓馬君はデフェンスだし、前にでるのは仕事じゃないからしょうがないよ」

「んでも誠は前に出てんじゃん。拓馬ももっとやる気出せって」

「ああ、ホームラン打って来るから見てろ」

「サッカーにホームランはねーよ」

笑いながらフィールドに向かう拓馬を見ていると少し羨ましい。翼や徳夫と自然な形で話ができて……。

「……が、頑張ったね、昭利」

それを取り戻す為にも、歩み寄りたい。

「お、おう」

振り返り、ぎこちないながらも笑顔を作る。試合は大事だけれど、それとは別の個人戦がある。

「えへへ。ガンバ、昭利」

明日香に応援されると素直に嬉しかった。それが拓馬からのアシストであったとしても。

「そんじゃそろそろ後半か……。よし、今度こそ俺もシュート決めるぞ。見ててくれよ、明日香」

「うん！　あ……んっ……うん……が、がんばって……ね？　ふぁん……」

明日香は目を丸くして驚いたと思うと、すぐに目を細めて手を振る。心なしか震えているように見える。今日は寒いのにTシャツ姿だから当然かもしれない。

「……？」

上に羽織っている薄いパーカーが揺れると、シャツの隙間からぷくっと立ったものが見えた。そしてホットパンツの隙間、タイツに変な膨らみが見える。

「どうかしたのか？　寒いなら……」

「んーん、大丈夫。なんでもないから……んぅ……あ……んっ……だから、頑張って……ちょっと……えと、あん……寒いかな。ごめん、もしかしたら……先、帰るかも」

「ああ、うん。しょうがないよ。あんま身体冷やすなよな」

「ありがと、昭利……んっ」

身体を抱くようにしてしゃがみ込む明日香。昼までは元気だったけれど、急な温度の変化で体調を崩したのかもしれない。このまま無理に応援してもらうよりは先に帰ってもらうほうがいい。今日は残念だけれど、試合はこれからも続くのだ。

「明日香、先に帰ってろよ。後で俺の活躍教えてやっからさ」

「うん、わかった。ごめんね。昭利……」
「こっちこそ、応援ありがとな」
「うん」
明日香に手を振ってグラウンドに駆け出す。
今日、応援に来てくれたこと。彼女が自分に向けて声援を送ってくれること。その事実だけで十分だ。それだけあれば大輔の言ったことなど嘘だと言い切れる。だから行ける。そして勝つ。今日は余計なのが居ないし、試合運びもこちらのペース。勝てる。そう確信できた……。
「……んっ……くふぅん……」
去り際、明日香の甘く苦しい声が聞こえたような気がしたが……。

＋＋

サーブの順番を変え、綾子、真奈、みなみを先に出す。当然点数など取れるはずもなく、差が広がっていく。だが、それも想定済み。追加ルールの5点差がついたらウエイト装着を見越してのことだ。

「おっしゃー！　5点目……って、おい、もしかして……　」

裕也はスパイクを決めてガッツポーズをするもハンディのことを思い出して顔を顰める。

「あーあ、バカだな、お前　」

点数を取ったところで逆に責められる裕也。しかし、ルールはルールと男子は足に重りをつけ始める。

「ふふ、よし、やったわ　」

約束通り重りをつける男子達。当然運動性は下がり、点数差は縮まっていく。

「よし、これなら勝てるわ！　」

千夏は見えて来た光明に闘志を燃やす。だが、そこであえて逆転を目指さない。今の状態から逆転勝利してしまえば自分達がハンディを背負うことになる。そうならないように点数を調整する。

まずは10点差まで広げ、そこから逆転すればハンディを背負わず、ゲームに勝利できる。単純な算数の問題だった……。

――　11対2　――

トーンとボールが転がったところで男子達がブーイング。

「おい、やる気あるのかよ！　」

「ふーんだ！　そっちが言いだしたハンディでしょ？　これもルールよ　」

「あ、くっそー、そういう手かよ……。なんだよ、ずりーなあ　」

裕也は苛立ちながら女子の作戦に文句を言う。

「しょうがないよ。さ、今度はリストバンドだ。ほら、つけるぞ……　」

リストバンドに重りを着けて装着する。当然運動性能は下がり、点数差は一気にひっくり返り、逆転に成功……。

「やったー！！　勝ったー！！　」

「いぇーい！！　」

女子バレー部は勝利に湧きたった。

「で？　その重りって次はどうなるの？　継続？　それとも外すの？　」

「そうだ。それは……　」

「ハンディは継続でいい。大丈夫、頑張れば勝てるって　」

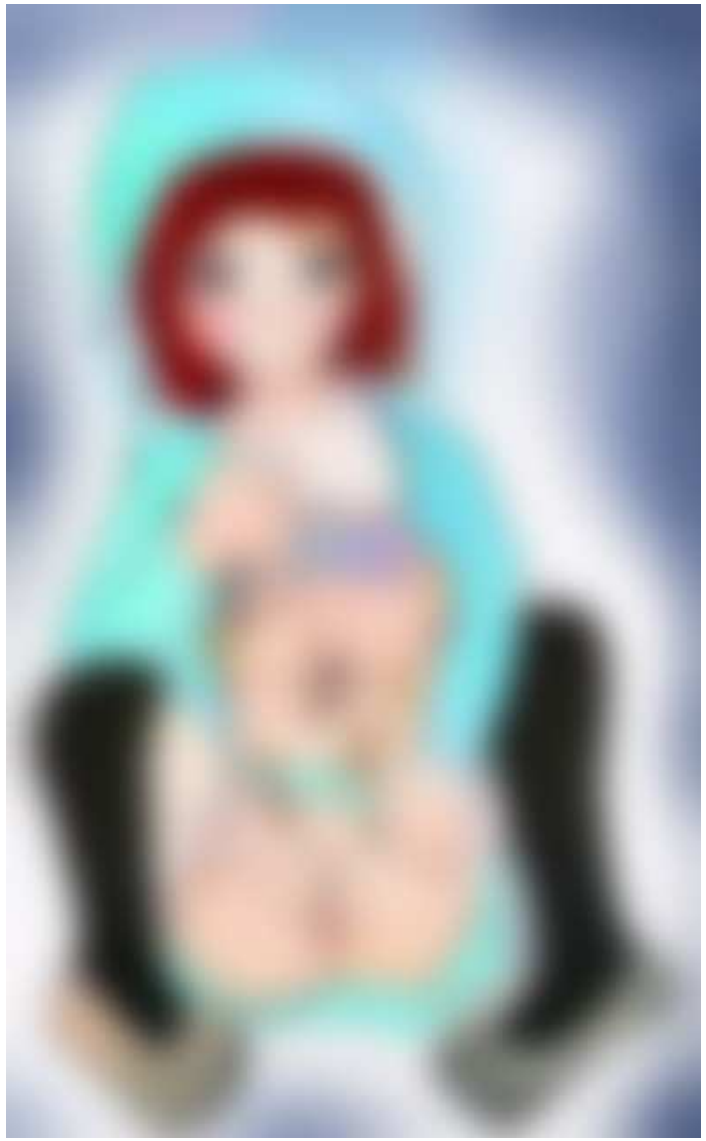
亮はメンバーを鼓舞してリストバンドを巻きなおす。

「ったく、これだから良い子ちゃんはなー……」
「いや、これぐらいやれるって。こういうピンチこそ楽しいじゃん。っていうかさ、俺、バレー慣れてきたし、余裕だよ」
雄二の言うとおり、男子チームは慣れが見え、逆に女子チームは疲れが出ていた。
「ふーん、大した余裕よね」
「ただ、さっきみたいにわざと点数を取らせてってのはやめようよ。これ以上ハンディ着けちゃ勝負にならないし」
亮の指摘はもっともであり、千夏も勝てば良いという態度に徹することはできなかった。
「こうしよう。両方の点数の合計が5の倍数になった時に点数を決めた時、相手チームにハンディを要求する。これでどうだい？」
「5の倍数？　えと、こっちが5点でそっちが4点の時にあたしが点取ったら、そっちにハンディってことでいい？」
「ああそれでいい。さらにそっちが連続で5点取ったらそのままハンデ追加。どうかな」
「おい、まじかよ。そんなんで勝てるわけ……」
裕也は不服そうだが、亮と雄二は取り合わない。さっさとコートに戻ってしまう。
「たくよ、こんな重り着けてまともに試合なんてできるかよ」
「重いっすね……」
後輩の智樹も足首の重りを見ながらコートへ行く。
「おらおら、愚痴ってねーで行くぞ」
大輔と春樹は小走りにコートへ戻る。よく見ると雄二と亮もトスの仕草が軽やかだった。
「？」
二人は首を傾げつつ、このハンディマッチに向かっていった……。

＋＋

後半が始まり、昭利は上がり始める。今日はフォワードが仕事をしてくれる。試合は前半のリードを守り、優勢。相手の焦りを突いてボールを運ぶ。
ディフェンスは後半も無理に上がりきっているからカウンターされたら守れない。だからこそ、攻めぬく。
走る中、監督の指示を仰ごうと視線を向ける。サインはライトウイングから上がれ。既に栄一が逆コーナーへ向かっている。そこへ再びパスを回す……、いや、違う。先ほどの攻撃を警戒していて昭利へのマークが減っている。
「このまま！」
マーク一人だけにぶっかりが激しい。昭利は倒されまいとぶっかりながらボールを進ませる。時にパスと見せかけて上がる。
「よし！」

「くそ！　待て！　」
相手は昭利よりがたいが良い。当たりが強く、ファールギリギリでぶつかって来る。
「くっ！　」
腕を広げて制し、その下をかいくぐり、前のめりになって前に出る。ミッドフィルダーでここまでドリブルを伸ばしたのは今日が初めてだ。このままシュートするしかない。今の勢いのまま……。
倒れそうになる上体を起こす。マークについていた子はそれに体勢を崩して崩れ落ちる。
「わっ！　」
泥を盛大に跳ねさせ、倒れ込む選手。昭利はノーマークのままキーパーへ向かう。
「いけ！！　」
ゴールを見る。キーパーは前傾姿勢からいつでも左右に飛びかかれるよう昭利の足を見る。昭利の視線はその先にある。ゴールネット。そこに集中……するつもりが、誰か居る。女の子。明日香……。
「明日香！？　」
彼女がゴールの向こうに見えた気がする。きっと自分のシュートを祈ってくれている。だから応えたい。
ボールの中心からやや左を蹴る。ボールは最初勢いよく左に飛び、キーパーもそれに向かって飛ぶ。だが、回転がかかり、右へと緩やかに曲がりそのままゴールの右端へとおさまった。



「よし！」
審判の笛がなる。ゴールが決まった。
「よっし、ナイスシュート！」
上がってきた栄一が昭利の肩を叩く。
「ああ、お前がマーク引っ張ったおかげだ」
「謙遜すんな、お前の実力だ。こりゃ俺もスタメンの地位が危ないな」
「そん時は俺とお前でスタメンなればいい」
「……ああ、そうだな」
栄一は昭利の頭をぽんぽんと叩くと自陣へ戻る。劣勢の相手チームは少しでも早くキックオフしようと速攻で上がる。遅延行為はスポーツマンらしくないと、昭利も上がろうとした。だが、後ろ髪をひかれるような気がする。振り向くとまだ明日香が居る。彼女は気が抜けたのかしゃがんでいた。具合が悪いのにシュートのタイミングまで見ていてくれたと思うと頑張ったかいもある。
「へへ、いいとこみせたかな」
鼻をこすりながら得意顔の昭利。競り負けた敗者は泥の中立ち上がり、昭利を睨んでいたが、視界には入らない……。

＋＋

勝負は一進一退。最初こそハンデのおかげで優勢に進めていた女子チームだが、みなみや綾子を狙われると弱い。

「いけ！」

ズドンと勢いよくコートに突き刺さるボール。その勢いは男子バレーであっても力強い。

「ちょっと、今グーで殴らなかった？　反則よ！」

「してねーよ。なんか証拠あるのかよ」

ルール違反があろうと明らかなモノ以外はおとがめなし。勘違いで流される。それが審判無しの試合。

「緒方君、ルールを守ろう。グーは禁止だ」

だが、意外にも亮が口を挟む。

「なんだよイインチョ、女子の味方するのか？　おあいにくさま、俺はちゃんとこうやって叩いたぞ」

パーで叩く素振りを見せ、のんきに鼻歌を歌う。

「とにかく、バレーボールのルールを守ってフェアにやるんだ」

「わーったよ。ったく、うっせーな」

亮に強く言われ、大輔は仕方なしと頭下げる。

「萩さん、すまない。次のサーブ権はそっちにして、今のスパイクはノーカンにしよう。それでいいかい？」

「ええ、ありがとう、浅木君」

一組クラス委員の亮のフェアプレー精神にほっと胸をなで下ろす。正直、このままグーでのスパイクをされてはバレー部員でも取れる気がしない。そうでなくとも今ので麻帆の腰が引けている。澪も気合こそ十分だが、やはり女子。男子の本気の腕力を見せられては気持ちが退ける。

「それじゃ、行くわ」

気合を入れてサーブをする。このゲームを取らないと次のハンディを背負わされるのはこちら……。

「よっと！」

大輔はサーブを軽く受けるとそのまま上げる。そして今度は亮がスパイクを放つ。その威力は大輔ほどではないが、直線でコートの隅っこを捉える。

「ああ！！」

サーブ権は移動し、再びピンチを迎える女子チーム。千夏は舌打ちし、構える。次のサーブは雄二。彼は腕と足に重りを付けている。だから先ほどからずっと彼のサーブは楽に受け流せている。

「いくぞ……！」
彼はボールを上げると、勢いを付けてサーブする。その勢いは強く、よく伸びる。今までとは違う勢いがあり、狙いも穴であるみなみと綾子の合間を縫う。
「きゃっ！」
取ろうとするみなみは頭を庇いつつもなんとかレシーブする。ボールはあさっての方向へ飛ぶ。
「レシーブ！」
澪はボールを追いかけ、飛びつく。それはかろうじてコートに戻る。だがネットギリギリ。春樹はネット越しにボールを叩き、そのまま落とし込む。明らかな反則だが、他人からは見えない。
「あ！！」
無情にも転がるボール。2対2から迎えた2対3。次のハンディは女子チームの番。
「あーあ、なにやってるのよ、もう」
「ごめんなさい……」
ボールに飛びつく仕草すら見せない綾子はみなみを遠慮なく文句言う。
「あのねえ、それを言うならあんたもそうでしょ！　さっきから取れるボールも取らないで、なんなのよ。全然やる気ないじゃないの！」
「あら、そんな言い方していいの？　せっかく手伝ってるのに、バレー部続ける気も無くなるわ」
「あんたなんて居たってしょうがないじゃない！　どこでも行きなさいよ！」
「あら、じゃあそうさせてもらうわ。さよなら。後は五人で頑張ってね」
「ふん！　せいせいするわ！」
「ちょっと千夏ちゃん、それに中倉さんも……」
始まった喧嘩に麻帆はおろおろしだす。原因を作ったみなみもばつが悪そうに俯いてしまう。
「邪魔者が減ったわ！　やる気の無い人はいない方がいいし！」
「……」
それはみなみにも真奈にも突き刺さる言葉。けれど、負けが見え始めて千夏も余裕が消えていた。
「ほら、次、行くわよ」
ギスギスしたチームを急かすも皆表情が暗い。
「ちょっと待って。そっちのハンディだ。ええと、何か重りを……」
特別ルールとしてハンディを受けるべく、亮は考え込む。もう重りもリストバンドも在庫が無い。これではハンディが掛けられない。男子達は考え込んでいた。
「さて、どうするの？」
「うーん、何か重りとか無いとハンディにならないかな」

「ふーん。つまり、重りに変わる動きにくさがあればいいわけ？」
「ああ、それでもいい」
「ちょっと綾子、何勝手に話し進めてるのよ。さっさと出ていきなさいよ」
「いいじゃない。あんた達じゃ進まないでしょ？　そうだ。考えたわ。あのさ、服を一枚脱ぐってのはどう？」
「な、そんなの……ずるいわ！　ありえない」
「しょうがないじゃない。だって重りが無いんでしょ？　ねえ、そっちはどう？」
「ひゅー、いいんじゃない？　じゃ、一枚脱げよ」
「勝手に決めないでよ！　そんなルール認めないわ！」
「じゃあどうすんだよ」
「だから、その、男子の重りを外していいから……」
「それはダメだろ。ハンディは継続って約束だ」
にべもなく却下され閉口する千夏。ハンディの取り消しはあちらに分があるが、服を脱ぐという提案は受け入れがたい。
「いいじゃな。一枚ぐらい」
「あんたねえ」
「よく考えてみなさいよ。16点先取なのよ？　男子達にずっと取らせたらいいじゃない。ゲームには負けるけど、あと14点、つまり2枚よ。靴下と上履き混ぜたら余裕よ」
「おい、そりゃねーよ。靴下はセットだろ。セットで一足なんだからよー」
「でも一枚は一枚だわ。位相的に考えれば靴下は起伏のある平面だもの」
「いそう？　きふく？　なんのことだ？」
「キミは黙っていろ。正直ルール変更をハンデの直前で変更するのはズルイと思う。でも、靴下一枚ずつを認めよう。そうすれば問題ないだろ？」
「……ねえ、千夏ちゃん。それなら……」
「……わかったわ……、それでいい」
これ以上ごねたところで好転しそうにない。しぶしぶ承諾し、靴下の片方を脱ぐ。ゲームに負けるのは悔しいが、このまま十点取らせればシャツの上と靴下を脱いで終わりにできる。だから問題はないはず……。
「それじゃゲームの続きだ。さ、行くぞ……」
亮はボールを弾ませるとコートへと戻った……。

＋＋

後半の試合展開はスムーズに進んだ。
先ほどまで当たりが強かったディフェンスが後半出場していないこともあり、昭利は強引なドリブルでぐんぐん上がり、状況に応じて栄一や誠にパスを回した。

泥だらけのフィールドを走る中、相手も怪我を恐れてか捨て試合に移行するのがわかった。正直手を抜かれるのは癪だが、勝ちは勝ち。総当たり戦の一勝も後の県大会へのピースの一つになる。失得点差も考慮して最期まで点数を取りに行く。昭利は泥まみれになりながらフィールドを駆けた……。